

## 哲 学 と 私

川 村 三 千 雄

私は、始め数学のコースを選んだが、その後、哲学科に方向転換した。人並みに青年時代にあり勝ちな精神の不安と動揺が原因だったようだ。これについては周囲の人々は大部分反対した。その理由は、いろいろあった様だが、ある人は哲学では飯は喰えないというのである。確かに当時は哲学などという学問は、処世上最不適なものだったらしい。第二には、哲学などやると気が変になって死にたくなるのが多いというのである。藤村操以来そんな若者もあったらしい。

こんな種の反対理由はまともに考えるには値いしないと気負い込んでいたので、当然私の決心を変えることにはならなかったのである。ところが、当時クラス主任であった先生に呼ばれて「哲学をやっても、どうせ何も判るものではない。哲学は趣味にして、数学を続けてはどうか」という御忠告を受けたのである。この先生は数学の先生であったが、哲学にも多少関心は持って居られたらしい。

今にして思えば、先生は軽い気持で言われたのであろうが、私は簡単にそれに承服することとは出来なかったらしく、いささか憤然として反論をなしたのである。内容は全く忘れてしまったが、若気の至りということである。

希望通りに、哲学科に入学した訳だが、当初の若い情熱は次第に薄れて行った。2, 3の講義の外は余り興味のない多くの学科を、単位取得のために聴く。それに、あとは横文字の原書に追い廻される。自己の問題の解決とか、思索などという呑気なことを言っている訳にはゆかぬ型通りの退屈な哲学々生のくり返えしなのである。それでも自分の選択した道だと観念して、どうやら大学の課程は終えたのである。

さて、卒業してみると就職口がない。哲学では飯は喰えぬと前に言われた

のが現実として現われたのである。遊んでいられる身分ではないので、仕方なく数学の教師となった。

3, 4年経って、商大の前身小樽経専に、幸運にも拾ってもらったという次第である。斯くして30余年の哲学教師生活が始まった。

そして今、退職して半年、一体自分は哲学の教師として何をして来たのかと、考えているのである。

ところで、哲学を教えるということになってみると、仲々厄介なものであることに気が付いた。数学は論理が簡単明白で、答えは一つ丈であるが、哲学はそうはいかない。論理的であることは共通だが、答えは一つではない。方法も一つではなく、唯物論もあれば、観念論もあり、一元論もあれば二元論もある。哲学者のいる丈同じ数の哲学思想、哲学体系があると言ってよい。勿論、教える当人に一定確乎たる哲学的思想体系があつて、それを信念をもって教えることが出来れば、別に問題はないだろうが、そう簡単にはいかない。いきおい、一般教養ということなので、紹介解説ということになる。それも結局自分の好みに従って、テーマや材料を選ぶことになる。つまり、寄木細工のような教養知識を与えることになってしまう。考えてみると、どうやらソフィストと余り変りはないのである。ソフィストは教師の祖先であるとするれば、これも運命的な廻り合せかも知れぬ。プラトンやアリストテレスの痛烈なソフィスト批判を思い出しては、ひやりとするのである。

講義と研究とは直接につながりはなかったが、結局同じようなものであった。原書や参考文献を読んで何とか一つの論文にまとめ上げる。何とはなしにテーマを選んで論理的統一性という視点で作り上げるのである。此の場合も多くは原書や参考文献の中からの拾い集めの断片の寄せ集めであつて、自己の創造とか思索とかは、あまり無いのである。従つて、これも又ソフィスト的でしかなかった様に思われるのである。慚愧の至りであり、凡そ哲学の本質からは程遠いものである。

大分以前から、眼疾を患らい、原書からは勿論、その中には活字からも疎遠となり、致命的なことではあつたが、それによって、哲学とは何かを根源

的に考えてみる機会を与えられたようにも思うのである。活字から切りはなされると、後は自分で考えるより外はない。そうしてみると今まであまりにも活字に振り廻されて来たことに気付く。本を読むことは大事であるが、それにあくせくしていると、却って自己自身の思考がお留守になる。活字の論理的有意性をたどり、それを一応理解しようと専念するが、それは本当の哲学ではない。何故かと言えば、それは、自己の主体的真理でないばかりでなく、時には全く無縁なのである。

哲学とは「哲学する」ことであると学生には言いながら、実は私自身それをなしてはいなかったのである。そうして今になって愚かにも哲学とは私にとって何だったのかと自問しているのである。多少の哲学的知識は持っていて、哲学的議論らしきものは出来ても、本当のことは何も知ってはいない。即ち、根本的真理については無知という外はない。かつて若い頃に「哲学をやっても何一つ判らない」と私に言われた先生の言葉は正しかったということ認めざる得ないのである。

然し、私は哲学をやったことは全く無価値であり、無意味であったとは思わない。単に素朴な軽い意味で言われた先生の言葉を理解するには、今までの年月が必要だったのかも知れないと思うのである。

ソクラテスの教えた「無知の自覚」ということが、つまり結局は哲学の本質ではないかと思うに至ったのであるが、そのことは決して哲学することを放棄することではない。むしろ「無知の自覚」を深めることが、本質であるとさえ考える。それは多分「無限に問う」ということにもなろう。単純な独断的停止はどれも本物ではない。従って、むしろ言葉の本来の意味でのスケプテシズムが正しいように思われ、判断中止はそこに止まるのではなく、哲学することを更に続けることであろう。

退職ということになって、講義もなく、勿論、論文を書くなどということもなくなった。哲学を他人に対して教えることも、又自己の思想らしきものを他に発表することもなくなった。少くとも、哲学という職業からは解放されたのである。

今は、無為蟄居の日々を送っているのである。生きている限り、「考える」ということから解放されることはないようだし、その上なお考える材料も多く残っているように思われる。素朴に肯定していたことが、疑わしくなったり、安易に通り過ぎて来たことが、重大な意味を持って来るのである。それらの多くのことを何の制約もなしに自由に考える。結論を求めて焦ることもない。無理な論理的統一を、敢えて要求しようとしめない。多分、こうした断片的思考や、怠惰な思索からは、何ものも生まれては来ないであろうが、私はそれで良いと思っている。

私の原初的な素朴な自己の哲学への帰還と考えているからである。